

お詫び

『経済学・経営学学習のために』平成30年度前期号、12頁、22行から24行にかけて「研究の到達点をふまえ、～ことも重要。」の文が重複しておりました。お詫びいたしますとともに、以下に再掲いたします。

また無用の用ということに関わるが、軽視し、あるいは試験対策と割り切って機械的に記憶したことが後々、思いの外、意味をもって還って来ることがある。

歴史は、人々がこれまでどのように暮らして来たのか、ということの集積であり、さまざまな時代、地域で展開された社会構成全般に係る対象は無限に見出しうる。そのなかで経済的事項に目を凝らすことになるが、日本史をはじめとする社会科系科目全般・古文・漢文に限らず、自然科学、地理、語学…基礎知識を確認し、その断片を繋ぎ合わせ、ようやく活かす時が来たかと心得て欲しい。

経済学・経営学部の学生を念頭に、専攻分野に関する興味・関心はあらかじめ確認するまでもないだろうが、これまでの履修・学習歴にかかわらず、日本史に興味、関心がある（それに乏しければ、興味・関心を向けるよう努める）ことが重要だ。今日に繋がる経済の発展過程を解明することが主旨であるからと言って、経済的な事項に対象を限定するのは不十分である。「経済」が「経国（世）済民」、国（世）を治め、民を救うという、政治を意味する語句の略であるとされ、経済は政治をも規定する社会構成上きわめて重要な要素ではあるが、経済のみが独り歩きをしている訳ではない。そのもとには経済を動かす人間、経済に動かされる（時に翻弄される）人間がいる。時代背景との関連に留意することが欠かせない。専門の研究者の執筆による一般読者向けの平易な概説書、気軽に手にし、目を通すことのできる新書や文庫版でよい（岩波新書 シリーズ日本古代史・日本中世史・日本近世史・日本近現代史全30巻、岩波講座『日本歴史』全22巻、講談社学術文庫 日本の歴史シリーズなど。研究の到達点をふまえ、情報が更新されているという点では、近年の刊行であることも重要）。そのなかから関心を寄せる時代に関する通史2、3冊を選び（異なる著者による同時代に関する叙述の読み比べが必要）、通読して当該期の社会を概観しておこう。概説書に限らず、時間が許す限り、さまざまな分野に関する書物の多読を勧める。情報選択にも応用できることだが、価値あるもの、そうでないものとを区別するうえでは、多くの「本物」を知ることが必